



図1 狩野山雪筆「雲龍・雪梅・風竹図」修理後



図1-3 「雪梅図」落款部分



図1-2 「雲龍図」落款部分

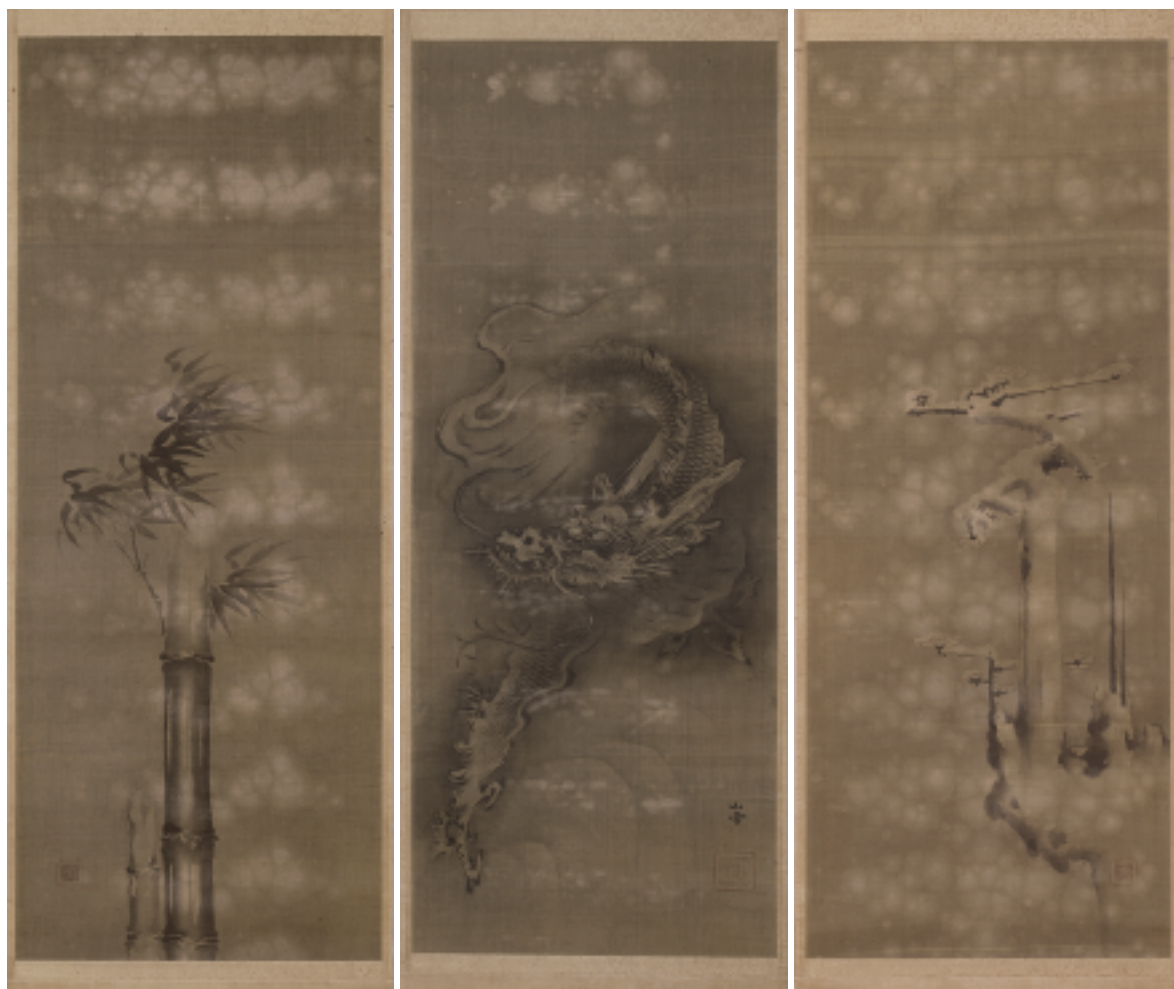


図2 狩野山雪筆「雲龍・雪梅・風竹図」修理前



図3 収納箱 修理後

〔修理報告〕

狩野山雪筆「雲龍・雪梅・風竹図」

はじめに

一 修理前後の概要

二 修理方針と方法

三 修理で得られた知見

おわりに

はじめに

徳川美術館では、平成二十四年（二〇二二）十二月より「公益目的事業会計」文化財・史料補修費により、狩野山雪（一五九〇～一六五二）筆「雲龍・雪梅・風竹図」（徳川美術館蔵、以下「本図」と略称）の修理を行った。本図は、平成二十一年秋に吉田家より徳川美術館に寄贈された作品である。もと名古屋の商家高麗屋吉田家に伝来した作品で、高麗屋の道具帳には「小西勘左衛門出佳吉取次／一、金拾六両式分拾文也／狩野山雪筆／三幅対掛物／中雲龍／左風竹／右雪梅／箱書付了意」とあり、弘化三年（一八四六）に購入し

狩野山雪筆「雲龍・雪梅・風竹図」

薄田大輔

たことが分かる。当館に寄贈された時の作品の状態は、本紙の一部に欠損が見られ、大多數の折れや皺が生じており、さらに広範囲にわたり多数の汚れと染みが確認できた。また、装丁にも多数の皺と折れ、染みが確認でき、一部には糸の解け、擦傷や虫害による欠損が見られ、展示・公開が難しい状態であった。折しも、京都国立博物館で山雪の大規模な回顧展「狩野山楽・山雪」展（平成二十五年三月三十日～五月十二日）が開催されることとなり、本図は同展覧会での初公開に合わせ、修理を施すこととなった。

狩野山雪は、九州肥前に生まれ、幼名は彦三という。豊臣秀吉に仕えた京狩野家の祖・狩野山楽（一五五九～一六三五）の養子となり、二代目として京の公家や寺社をパトロンとして活躍した。アクの強い画風、幾何学的構図など奇想的な画風で、近年一躍注目された絵師である。特に、龍図は山雪が得意とした画題で、図様は牧谿の龍を参考に行っているが、その細かな鱗の描法や輪郭線の強調、明暗の対比などは、南宋の陳容の龍図に学んでいるとされる。左右幅の竹梅は吉祥の植物の取り合わせであるが、狩野山楽筆「龍虎図屏風」（妙心寺蔵）など、「梅」はしばしば龍と共に描かれる図

様でもある。樹幹や枝ぶりが臥した龍に似る梅を「臥龍梅」と呼ぶように、山雪の描く梅にも龍のイメージが重ねられていると指摘される。また、「竹」は龍と対になる虎と共に描かれてきた。中国古代より「龍」は「雲」と、「虎」は「風」と組み合わせられ、「竹」は虎の背後で葉を揺らし、幹をたわませることで、目に見えない風を表現してきた。すなわち、龍と関連のある植物を左右に配す三幅対である。

本稿では、修理を担当した有限会社 墨仙堂（代表 関地久治氏）による詳細な報告書、修理記録写真を基に施工の概要を報告する。

一 修理前後の概要

修理前の損傷状況と修理後の様子

修理前の本図は、三幅共に本紙に多数の折れや皺が見られ、表装裂にも破れや欠失・折れが生じていた。特に、上下裂に配された「桂」は、厚みや太細の違いがある節糸によって織られ、折れが生じやすく、裏打ち紙の糊浮きや本紙料絹・表装裂の欠失に至る要因となっていた。また、三幅共に全体に生じていた白色円形の染みは、作品鑑賞の妨げになっていた。恐らく、巻かれた状態で生じたカビ等の微生物による影響であると考えられる。さらに、墨染めされた肌裏紙に生じた白色円形の染みは、本紙料絹及び墨が変色したように見える大きな要因になっていた。

このような構造的な劣化損傷は、更なる損傷に繋がり、作品の鑑賞を妨げることから、これらを軽減・改善させ、作品が長期的な保存に耐えうるよう、有限会社 墨仙堂において作品の解体を含む修理処置を施すこととなった。

（一）本紙

①物理的損傷

欠失

「修理前」〔挿図1〕

「雲龍図」では、本紙右下部の柱裂の付け廻し箇所に沿って本紙料絹が欠失し、墨染めの肌裏紙が露出していた。「風竹図」では、本紙右部の本紙料絹と裏打ち紙に虫害欠失箇所が見られた。欠失箇所からは裏打ち紙の一部が露出していた。

「修理後」〔挿図2〕

本紙料絹の欠失箇所新たに適する補修絹を選定し、繕いを施した。補修絹には電子線劣化絹を使用した。

折れ・皺

「修理前」

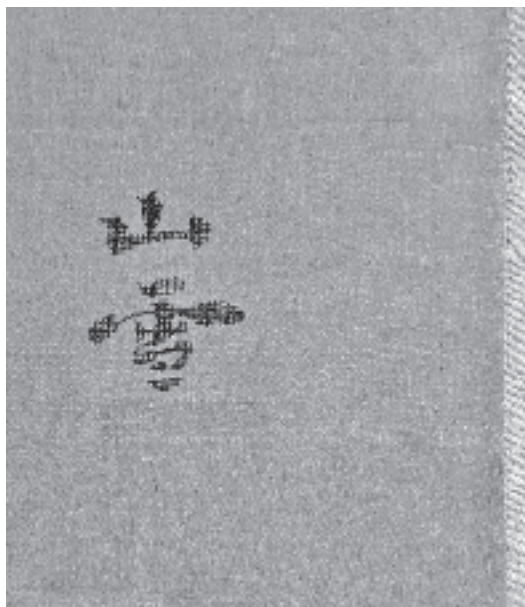
三幅の本紙全体に大小多数の折れや皺が見られた。特に「雲龍図」、「雪梅図」の本紙と柱の付け廻し付近に折れが多数生じていた。

「修理後」

本紙を伸ばし、裏打ちを打ち直したことで、折れや皺を平滑にした。さらに、折れや皺の裏面より折れ伏せを施し、今後の折れ破損の要因を軽減させた。

②視覚的損傷

「修理前」



挿図2 「雲龍図」本紙右下部分 修理後



挿図1 「雲龍図」本紙右下部分 修理前

三幅共に、本紙の上部から下部にかけ連続して白色円形の染みが見られた。特に、「雪梅図」では他の二幅と比べ広範囲に白色円形の染みが見られた。

〔修理後〕

濾過水を使用して本紙のクリーニングを行い、可能な限り染み・汚れの除去に努めた。白色の染みが生じた旧肌裏紙を除去し、新たに適する色調に染色した肌裏紙で裏打ちしたことで、本紙表面に見られた白色の染みを解消した。

③彩色層

〔修理前〕

白色円形の染みに伴い、墨がやや薄く見える箇所があった。これは本紙の各所に見られた付着物や、肌裏紙に生じた部分的な白色円形の染み（色抜け）などが原因であった。

〔修理後〕

付着物や白色円形の染みが生じた旧肌裏紙を除去し、均一に染色した肌裏紙を施したことで色調に斑がなくなり、墨が明瞭に見えるようになった。

(二)装丁

①物理的損傷

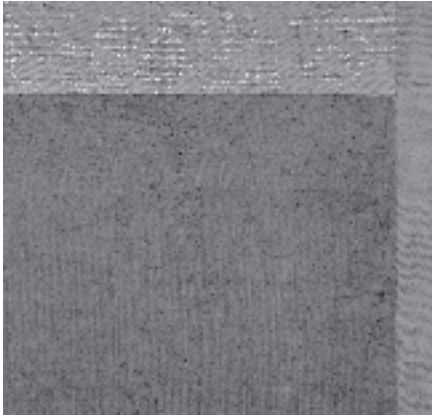
糸の解け

〔修復前〕(挿図3)

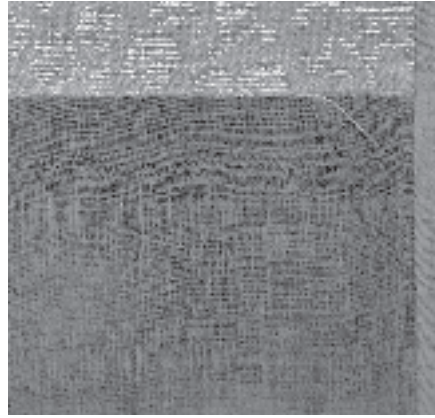
「雪梅図」の一文字上の裂に糸の解けが見られた。

〔修理後〕（挿図4）

糸の解けを整形し、元使用した。



挿図4 「雪梅図」本紙右上部分 修理後



挿図3 「雪梅図」本紙右上部分 修理前

裂の欠失

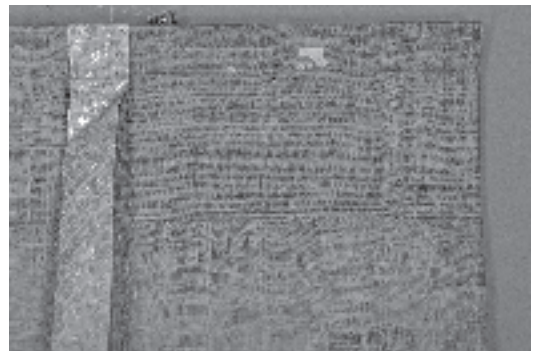
〔修理前〕（挿図5）

三幅の表具左右端部分には、擦傷や虫害による表装裂の欠失が多数生じていた。特に、上下裂の表具左右端部分に生じた欠失は著しく、「風竹図」に関しては、擦傷により表具右上部の欠失箇所から八双が露出していた。また、虫害によって表装裂及び肌裏紙が失われ、作品に穴が開いた箇所も見られた。

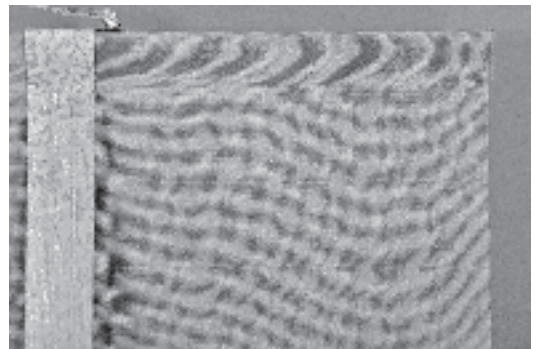
三幅の上巻絹には、多数の欠失が確認出来た。欠失は更なる破れの進行や糊浮きの拡大に至る要因となっていた。

〔修理後〕（挿図6）

一文字・中縁の表装裂に生じた欠失箇所には似寄りの絹を選定し、繕いを施した。また、欠失の著しい上下の表装裂及び上巻絹を新調した。



挿図5 「風竹図」表具 右上部分 修理前



挿図6 「風竹図」表具 右上部分 修理後

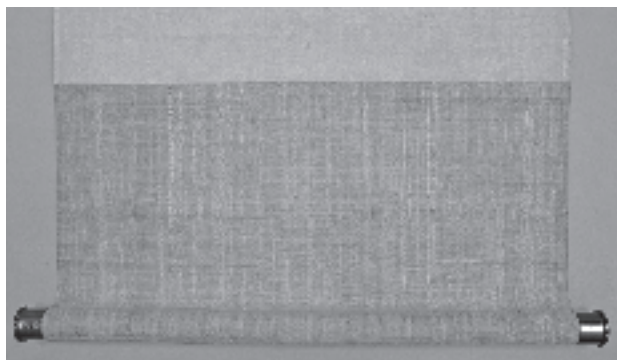
裂の折れ・皺

〔修理前〕(挿図7・9)

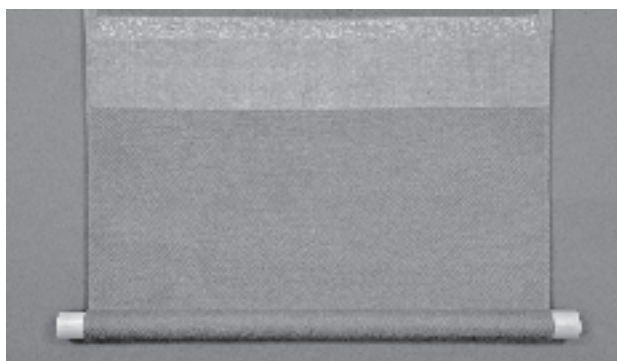
三幅の上下裂に横折れが多数生じていた。上下裂は表装裂の特徴から折れが生じやすく、他の表装裂に比べ多くの折れが見られた。特に、「雲龍図」の中縁裂と一文字裂の付け廻し付近に折れが多数見られた。

〔修理後〕(挿図8・10)

上下裂を新調し、元使用する表装裂に関しては、新たに裏打ちを行った。さらに、長期間仮張りに掛けることで平滑になり、表装裂に生じた折れ・皺を解消した。



挿図7 「雲龍図」表具下部 修理前



挿図8 「雲龍図」表具下部 修理後

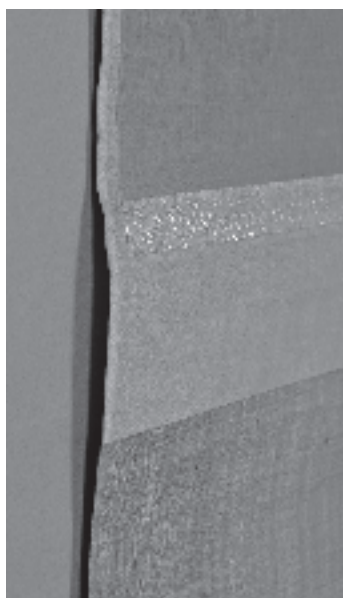
糊浮き

〔修理前〕

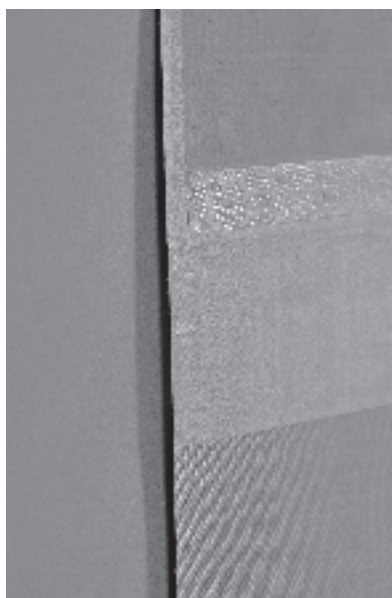
三幅の総裏紙に糊浮きが多数見られた。糊浮きは折れに沿って生じていた。特に、「雪梅図」の端部分には多数の糊浮きが生じていた。

〔修理後〕

新たに裏打ちを施したことで糊浮きなどを解消した。



挿図9 「雲龍図」表具左下部 修理前



挿図10 「雲龍図」表具左下部 修理後

暴れ

〔修理前〕

三幅の表具全体に暴れが生じていた。

〔修理後〕

作品の裏打ち紙を全て新調し、長期間仮張りすることで平滑になり、表具全体の暴れを解消した。

②視覚的損傷

汚れ・染み

〔修理前〕

三幅共に、表装裂にも上の裂から下の裂に至るまで白色円形の染みが生じていた。特に「雪梅図」の表装裂は、他の二幅に比べ染みが広範囲に見られた。また、三幅の作品全体は茶褐色に汚れており、表具裏面上部は黒色の煤によって汚れが生じていた。

〔修理後〕

損傷や汚れ・染みの著しい上下裂は新調することとした。また、一文字・中縁に関しては、濾過水を使用してクリーニングを行い、可能な限り染み・汚れの除去に努めた。

(三)その他

①裏打ち紙

〔修理前〕

裏打ち紙は、経年劣化によりしなやかさが失われ、強度が著しく低下した状態にあった。脆弱になった作品は折れや皺等を生じやすく、破れや欠

失などの損傷に拡大する原因となっていた。

〔修理後〕

強度が乏しい裏打ち紙は全て除去し新調した。

②保存

〔修理前〕

経年劣化でしなやかさを失った本紙を細く巻くことで、折れ等の損傷が拡大したと考えられる。

〔修理後〕

新調した太巻添軸に作品を太く巻いて保存することで、作品に懸かる負担を軽減した。

過去の修理状況

(一)折れ伏せ

〔修理前〕(挿図11)

三幅共に表具の最背層である総裏紙に多数の折れ伏せ紙が施されていた。おそらく、作品に生じた折れに対する応急的な処置であったと考えられる。

〔修理後〕(挿図12)

今回の修理では、過去の修理時に施されていた折れ伏せ紙をすべて除去した。修理後は本紙の折れが生じている箇所、及び今後明らかに生ずると思われる箇所に着紙で新たに折れ伏せを入れた。

(二)肌裏紙

〔修理前〕

三幅共に濃い墨で染められた肌裏紙が施されていた。本紙全体が肌裏紙



挿図12 「雲龍図」表具裏面 修理後



挿図11 「雲龍図」表具裏面 修理前

の色調の影響により暗く見えていた。

〔修理後〕

新調した肌裏紙及び増裏紙を墨・天然染料（矢車・桃皮）で染色後、水酸化カルシウム水溶液で色素を定着させ、使用した。

作品の基本データ

画題「雲龍・雪梅・風竹図」

落款・印章

中幅 本紙右下部「山雪」／「蛇足軒」（白文方印）・「山雪」（白文方印）

右幅 本紙右下部「山雪」（朱文方印）

左幅 本紙左下部「山雪」（朱文方印）

表具裏面貼紙（修理後は別保存）

「山雪筆／中龍」「山雪筆／右雪梅」「山雪筆／左風竹」

書付 収納箱蓋裏面（修理後は別保存）

「山雪／雪梅／雲龍／風竹／三幅對畫名印有之正筆／古筆／了意證之」／「琴山印」（朱文方印）

収納箱 〔修理前〕 三幅對印籠箱

〔修理後〕 三幅對桐太巻添軸桐印籠箱（福井工房製）

本紙

基底材 絹帛（縦・緯共に細い糸が用いられた平織の絹帛）

寸法 [修理前] 各縦九六・一糎 横三八・一糎

[修理後] 各縦九六・七糎 横三八・二糎

本紙枚数 一枚一面

画材 墨・膠

装丁

装丁形式 掛幅装

寸法 [修理前] 各縦一八〇・六糎 横四四・七糎

[修理後] 各縦一七九・七糎 横四〇・四糎

表装

[修理前]

形式 輪褶の行

表装裂

一文字・風帯

白茶地唐花唐草文金襴

中縁

白茶地梅枝散文緞子

上下

茶地紐

軸

黒漆塗撥軸

[修理後]

形式 輪褶の行

表装裂

一文字・風帯

白茶地唐花唐草文金襴(元使用)

中縁

白茶地梅枝散文緞子(元使用)

上下

茶地魚子(新調)

軸 象牙頭切軸(新調)

裏打ち

[修理前]

裏打ち紙 三層

肌裏紙 楮紙

増裏紙 楮紙

総裏紙 楮紙

[修理後]

裏打ち紙 三層

肌裏紙 楮紙(薄美濃紙)(新調)

増裏紙 美栖紙(新調)

総裏紙 宇陀紙(新調)

二 修理方針と方法

基本方針

(一) 実施する作業及び方針の決定・変更等は、徳川美術館学芸部との協議・監督の下進めた。

(二) 修理前の本作品は損傷が著しく、今後の安定的な保存を考える上で、解体修理を必要とした。そこで今回の修理では作品の装丁を解体し、本紙から裏打ち紙の除去後、本紙料絹の修理処置及び新たな裏打ちを施し、再び掛幅装に装丁することを基本方針とした。

(三) 修理作業は有限会社 墨仙堂の工房内で行った。

(四) 施工期間…平成二十四年十二月十六日～平成二十五年四月十九日

修理の概要

本紙

(一) 作品全体にエチルアルコールを噴霧し、カビの消毒を行った。

(二) 修理前の作品には本紙料絹に多量の糊浮きが見られた。肌裏紙を含め裏打ち紙全体の劣化損傷が著しいことから裏打ち紙を全て除去し、新たに裏打ちを施した。新たな肌裏紙には、楮紙(薄美濃紙)を選定し、墨・天然染料(矢車)で染色後、水酸化カルシウム水溶液で色素を定着させた楮紙を使用した。

(三) 墨の状態を調査した結果、作品に描かれた墨の状態は良好であった。そこで、剥落止めによる膠の過度な使用は墨の風合いを損ねる恐れがあると判断したため、今回の修理では墨の剥落止めは行わないこととした。

(四) 本紙のクリーニングには濾過水と吸水紙を使用した。加湿した本紙を吸水紙の上に置き、本紙中の水分に汚れ等が溶け出した所を吸水紙の毛細管現象を利用することにより、吸水紙に移し、汚れ・染みを除去した。

(五) 本紙料絹の欠失箇所新たに補修絹で繕いを施した。繕いは本紙料絹の欠失箇所の形状に整形した補修絹を施すことで、本紙料絹との重なりを無くすようにした。補修絹には本紙料絹に類似の「電子線劣化絹」を、本紙料絹の地色に近い色調に天然染料(矢車)で染色後、水酸化カルシウム水溶液で色素を定着させて用いた。

(六) 本紙の折れが生じている箇所、及び今後折れが生じると思われる箇所

に折れ伏せを入れた。折れ伏せ紙には楮紙(悠久紙・東中江和紙加工生産組合製)を使用した。

(七) 補彩は新たに繕いを施した補修絹の上にのみ行った。補彩に使用した画材は、顔料を膠で溶いたもの、あるいは棒絵具を使用した。

装丁

(一) 旧装丁材料

① 修理前に本紙に配されていた表装裂(上下裂)は、破れや劣化が著しいことから除去し、裏打ち紙(肌裏紙・増裏紙・総裏紙)には欠失や糊浮きが生じ、染みが多数見られるなど、元使用に適さないために全て除去した。また、軸木・八双・掛け紐・軸も劣化が著しいために新調した。除去した装丁については、全て別保存した。

② 表装裂(二文字・風帯・中縁裂)は元使用した。

(二) 新調装丁材料

① 裏打ち紙を全て新調し、三種三層の裏打ちを新たに打つ。新たに施す裏打ち紙は、伝統的に使用されている三種三層の裏打ちとし、作品に適度なしなやかさと強度を持たせるようにした。

裏打ち 三層

肌裏紙 楮紙(薄美濃紙 長谷川和紙工房製)

増裏紙 美栖紙(白雪 昆布専男製)

総裏紙 宇陀紙(福虎 福西弘行製)

② 表装形式に関しては、学芸部と協議し修理前と同じ「輪櫛の行」とした。

③ 新調する表装裂(上下裂)は学芸部と協議の結果、上下裂を新調する

こととし、適する表装裂を選定した。

上下…茶地魚子(廣信織物)

④八双・軸木・掛け紐・軸を新調する。

軸を古色付け(タバコの葉)して用いた。

(軸・八双…杉材軸木・八双(速水商店製)

掛け紐…正絹三色組紐(速水商店製)

軸…象牙頭切軸(速水商店製)

その他

各作業の接着には、伝統的に使用されている小麦粉澱粉糊(新糊)と、新糊を複数年瓶で寝かせた古糊を使用した。小麦粉澱粉糊は可逆性も高く、将来の再修理の際にも裏打ち紙等の除去を容易にすることが出来る。

肌裏打ち・繕い・付け廻し・仕上げ…新糊

増裏打ち・総裏打ち…古糊

小麦粉澱粉(中村製糊株式会社製)

収納

収納保存にあたっては修理後の作品に太巻添軸を添えて巻き、折れ破損の要因を軽減した。また、新たに製作した白絹帛袱紗に表具を包んだ後、新調した三幅対桐印籠箱に三幅を納めた。

調査

(一)目視による調査

修理前・中・後の作品の構造・損傷調査・本紙寸法を記録した。

(二)光学調査

修理前後・作業工程中の記録写真撮影を行った。写真撮影はデジタルカメラで行い、修理前後の作品全図・部分、更に修理作業中の表裏全図・部分、透過光撮影等も可能な限り行った。また、赤外線写真・紫外線蛍光写真の光学機器を使用した調査・撮影も同時に行った。

三 修理で得られた知見

本紙料絹の肌裏紙について(表1)

修理前の本紙料絹の肌裏紙について調査を行った。各幅の料絹から二箇所を選定し、織密度(三・〇三種×三・〇三種)における経・緯糸の数を計測したところ、それぞれの箇所で絹糸の数に大きな差があることが分かった。特に①と⑥の緯糸に関しては、最大百二十越の数の違いが確認出来た。また、本紙料絹の織りに関しては、平織りであった。

本紙料絹の肌裏紙についての考察

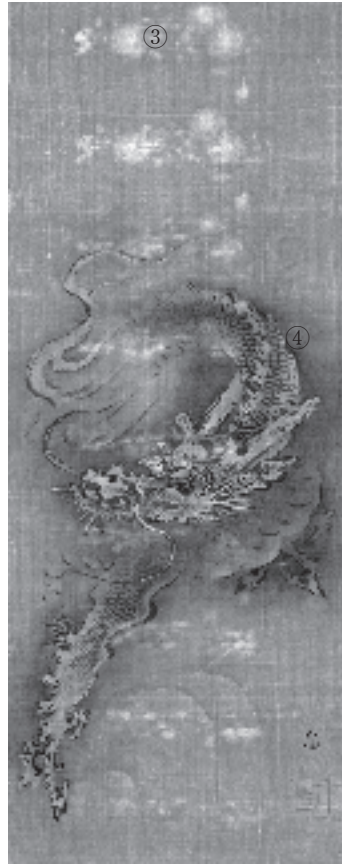
(一)修理前の本紙料絹の肌裏紙について

修理前、本紙料絹の肌裏紙は濃い墨で染められた楮紙が使用され、三幅ともに五段五枚が継がれて裏打ちされていた。画面は暗く夜の様な雰囲気を出していた。修理前の作品には、過去の修理時に施された「折れ伏せ紙」が確認された。しかし、これらの「折れ伏せ紙」は、総裏紙の上に直接貼り付けられていたことから、応急処置的に入れられていたと考えられる。これらの他に過去の修理の痕跡は見られず、過去に裏打ち紙の除去や解体

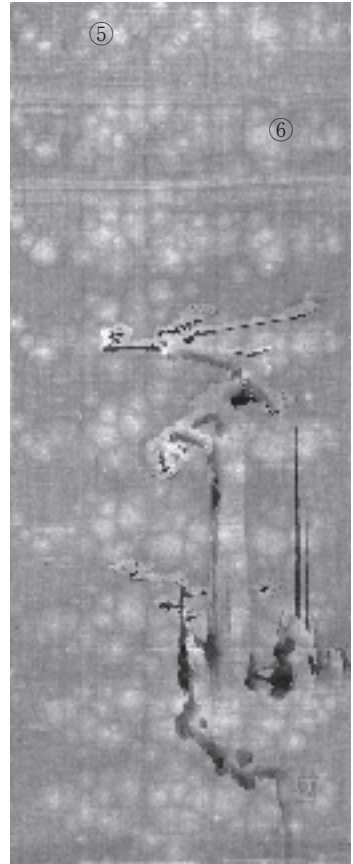
(表1) 本紙料絹の経糸・緯糸の数について



- ①：経120本(2 ッ入)
緯140越
②：経120本(2 ッ入)
緯200越



- ③：経124本(2 ッ入)
緯160越
④：経124本(2 ッ入)
緯180越



- ⑤：経120本(2 ッ入)
緯180越
⑥：経120本(2 ッ入)
緯260越

を伴う「解体修理」が行われたはつきりとした痕跡は見られなかった。

(二) 墨染めの旧肌裏紙についての考察

修理前に用いられていた墨染めの紙での裏打ちは、織目から透けて見える肌裏紙の墨色による効果が大きく、墨線で描かれた絵の線を鈍くしていた。墨線を見え難くするこの肌裏紙が、描かれた当初から用いられていたとは考え難い。伝世の間に本紙料絹が茶色に変色し、肌裏紙を打ち替えられたとすれば、墨染めの紙を使用し、画面に古美を感じさせるような暗い肌裏紙を用いたとも考えられる。

(三) 今回の修理で使用した肌裏紙の色調の選定について

今回の修理では、旧肌裏紙と同じ色調の墨染めの紙と、元と異なる色調に染色した紙を使用することが考えられた。肌裏紙の色調によって、画面に与える影響が大きく異なることから、学芸部と協議し選定した。

肌裏紙の色調の選定には、本紙料絹に仮裏打ちを行い実際の色調を確認した。仮裏打ちにはある程度本紙料絹に負荷はかかるが、肌裏紙の色調が作品に大きく影響する点と、本紙料絹が強度を十分有していると判断し、仮裏打ちを行った。肌裏紙の色調は、楮紙に本紙料絹の「地の色」を基準に染め、その色と比較するために異なる数種の色を更に染めた。肌裏紙除去後の本

紙料絹にこれらの楮紙を仮裏打ちし、乾燥した時点で学芸部と協議を行い、墨・天然染料(矢車)で染色した色を選定した。

(四)修理前後の肌裏紙の色調の違いについて

修理後の本紙の色調は、仮裏打ち後に確認した色調とほぼ同じであった。画面は修理前の暗さが無くなり、修理前に比べ、墨色が力を持つ様に思われ、料絹の地色とのバランスも保たれたと考える。

さらに白色円形の変色は旧肌裏紙を除去し、新たに肌裏紙を打つことで視覚的な違和感が和らいだと思われる。しかし、良く観察すると極薄く痕跡が見え、料絹への影響が少なからず生じていたことが窺える。これらの白色の染みは、およそカビによる変色と考えられるため、今後定期的な観察が必要であろう。また、修理作業中の肌裏紙の除去後、本紙料絹の裏面に旧肌裏紙に施されていた墨の粒子が残留した。特に「雲龍図」に多く残ったが、本紙料絹が痛まない程度に筆に少量の水を含ませ少しずつ取り除き、可能な限り除去した。

おわりに

以上が、有限会社 墨仙堂の報告書に基づく修理状況である。修理後、「狩野山楽・山雪」展に続いて、徳川美術館の書院飾りを再現した第三常設展示室でも公開された。本図は、山雪の得意とした龍という画題に加え、垂直に伸びる梅樹の図様などに山雪の特色がよく表れ、画風の展開を追う上でも基準的な作例といえる。この度、本図が修理され、再び広く公開することが出来るようになった意義は高い。

〔付記〕 末筆ながら、本図をご寄贈賜りました吉田家、修理施工にご尽力いただいた有限会社 墨仙堂代表取締役 関地久治氏をはじめ修理に従事されました皆様に深甚の謝意を表します。

(美術館 学藝員)

金 鯨 叢 書 第四十二輯 [年一回刊行]
— 史学美術史論文集 —

平成二十七年 三月 三十日 編集
平成二十七年 三月 三十日 印刷・発行

編集者 竹 内 義 誠
〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
公益財団法人 徳川黎明会

発行者 電話(3950)〇一一二番(代)
〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川林政史研究所

電話(3950)〇一一七番(代)
〒461-0023 名古屋市東区徳川町一〇一七
徳川美術館

電話(935)六二六二番(代)
〒605-0089 京都市東山区元町三五五
株式会社 思文閣出版

電話(751)一七八一番(代)
〒600-8805 京都市下京区中堂寺鍵田町二
株式会社 印刷 同朋舎

印刷所 電話(361)九一二二番(代)